

## バンド結成！コンサート開催！ ケアマネさんは道なき道の水先案内人



執筆 ▶ 葉山 靖明 ● (株)ケアプラネット  
「デイサービスけやき通り」代表取締役

当時41歳でリハビリ系のデイサービスに通い始めたことは、前号で書きました。今こうして原稿案を考えていても、発症後2年間の思い出が、あれもこれも、この人もあの人もと、浮かび上がってきます。

中でも自分たちで作った「リハビリーズ」というカタマヒ音楽バンドの練習やコンサートの様子が、今でもはっきりと思い出されました。今回はこの「リハビリーズ」と私たちをやさしく見守ってくれたケアマネさんのお話です。



### まひした右親指に装具 “ジャラ〜ン”に涙

デイサービスに通い始めて3カ月がたった頃のことです。昼食を食べていると、50歳くらいの大きな男が話しかけてきました。

「葉山さんは音楽が好きと聞いたんですよ。一緒にバンドやらんね？」

その人もカタマヒ、私もカタマヒで、バンドというのは音楽バンドのことで、ドラムを叩き、ギターを弾く、あの「バンド」です。

私は答えました。「あの一、昔はギターが好きでバンドをやりよったけど、今は私の右手はギターが弾けないんですよ……」

その大きな男は言いました。「俺も片手片足でドラムしよるっちゃ。葉山さんもギター弾こうと思ってバンドしたらリハビリになるよ！」

私「……」。“とても楽観的で、とて

も失礼なことを真顔で言う人だ!”というら立ったのを覚えています。

事実、私の右手はりんごも握れないくらいにまひし、拘縮していました。

数日間、昼も夜も「バンド?」「ギター?」「もう一度できる?いや無理?」と考え続けました。そして「右手の親指に装着する装具があれば、どうにかなるのでは?」とひらめきました。ケアマネさんに相談しましたが、装具のことは詳しくないようでした。

しかし、「バンド!? おもしろそうですね!」と肯定かつ賛同してくれました。

中途障害者というものは、道なき荒野を、歩いてゆく感覚をリアルタイムで持っており、自分の進む道や方向が「正しいのか?」「正しくないのか?」いつもかつも、分からないのです。“さまよい”と言うほど大げさなものではありませんが、今までの人生で培った、生きるための方法論がまったく役に立たず、いとも簡単に捨てざるを得ないのです。そして、必然的に孤独に道を創っていくのです。このときの「水先案内人」ともいえるケアマネさんの存在は大きかったと今でも心に残っています。

さて、ギター演奏用の右手親指の装具ができ上がり、1小節に1回だけ“ジャラ〜ン”とストロークすることができ始めました。

ドラムの人の家へ行くと、居間に電子ドラムがあり、彼は片手片足で叩き出しました。プロみたいでうまいことに驚きました。すぐに私も持参のエレキギターをアンプにつなぎ、“ジャラ〜ン”とセッション

葉山 靖明 はやま やすあき  
1965年福岡県生まれの50歳。専門学校で法人税法及び簿記論の講師を務めていた2006年、40歳のときに左脳内出血発症し右片まひに。翌年それまでの職場を辞して(株)ケアプラネット設立。現在は、デイサービス経営のかたわら講義・講演活動を継続中。社会福祉法人「夢のみずうみ村」理事。人間科学修士

ンのようなものをしました。うれしくて、涙が出そうでした。それは私の大きな驚きと大きな喜びでした。

翌週から、バンドの他のメンバー探しが始まりました。キーボードの女性、タンバリンの女性、ボーカルの40代の男性と、すぐにカタマヒのメンバーがデイサービスで集まりました。あと一人両手が使える女性がハーモニカ奏者として加入し、バンド名は、ボーカルの男性が「みんなカタマヒでリハビリばっかりやりよるから、「リハビリーズ」しかないやろ!」と笑って言って、それが採用されました。カタマヒバンド「リハビリーズ」の結成は、私の発症後、6カ月目であり、私は要支援2であり、新たな道は確実にでき始めていました。



## インフォーマル支援 それが最も重要!

福祉には、インフォーマルな支援という言葉がありますが、バンド練習支援は当然、介護保険対象外であり、バンドの練習は家族が公民館を借り、楽器運びなどはサポートがいるため、市のボランティアセンターに杖姿で出向き、交渉しました。

「バンド練習支援」は介護保険制度側から見ると「インフォーマル」なの

ですが、要介護者であるバンドのメンバー側からすると「病を負った身体にめげず、楽しく、うれしく、そして自己を表現する社会的重要性の高い活動」となり、もっと平たく言えば、「生きがい」なのです。「生きている実感」を感じ取れる最も重要な活動なのです。その「インフォーマル」という捉え方では「介護計画の隅の方」に追いやられそうなこの支援が、実はとても重要なのです。これは現在の「生活行為向上リハビリテーション」に引き継がれる考え方ですが、社会資源の調整機能まで含有した支援は今後、さらに必要とされることは間違いないでしょう。

最初の練習曲は坂本九の『明日があるさ』だったと記憶しています。メンバーの主体的でひたむきな精神性を代弁していたような気がします。

真夏に練習をし、秋が来る頃にはコンサートを開く話があがり、市内のホテ

ルに交渉し、喫茶店を無料で貸してもらい、チケットを作り、配りました。ひたむきで、一生懸命に、かたくなにコンサート開催を夢見ていました。もちろん、たびたび相談に乗ってくれたケアマネさんも招待しました。

2007年12月19日。平日の午後3時、観客が40人はいたでしょうか、私たちのバンド「リハビリーズ」のクリスマスコンサートが始まりました。私は司会とギターのパートでした（私は軽度の失語症でしたが、昔やっていた司会を希望しました）。コンサートは大成功であったと記憶しています。

あとで聞いたのですが、観客席の方は、バンドのメンバーのそれぞれのケアマネさんとそのケアマネさんが連れて来てくれた福祉関係者ばかりだったそうです。

新しい道を共に創ってくださった皆さまに、心の底からお礼を言いたい心境です。



ホテルの喫茶店で開いたクリスマスコンサートは大成功。観客はメンバーそれぞれのケアマネさんとその関係者でした

## 今月の私

ホテルで片手で洗濯したり、高速バスを乗り継ぐなど、僕のIADLがまた格段に向上しました。写真の前で、東北行脚をサポートしてくださった作業療法士さんとパチリ。

やはり現地に行くとは五感すべてから入る情報は重く、「震災」「津波」「原発」をどう考えたらいいのか、4年も経って、やっと僕なりのフレームができました。「災害」と「障害」って似てるなあと考え始めました。

7月後半の12日間を使って東北行脚を実行しました。目的は、僕が役員をしている社会福祉法人「夢のみずうみ村」が岩手県大槌町で開いている「子ども夢ハウスおうち」を訪ね、宮城、福島など震災のあった場所を訪ねたかったのです。長旅の体力も、真夏の気候も、移動のインフラも不安でしたが、無事帰ってきたところでホッとしています。

## 真夏12日間の東北一人旅

7月後半の12日間を使って東北行脚を実行しました。目的は、僕が役員をしている社会福祉法人「夢のみずうみ村」が岩手県大槌町で開いている「子ども夢ハウスおうち」を訪ね、宮城、福島など震災のあった場所を訪ねたかったのです。長旅の体力も、真夏の気候も、移動のインフラも不安でしたが、無事帰ってきたところでホッとしています。

